

こんな先生
いるよ!

瀬木恵里 先生

先進工学部
生命システム工学科 教授

「研究も、家庭生活も
全部大事に
両立させたい」

「ストレス」をしなやかに受け止めたい

先生は「うつ」という病に、どんなアプローチで迫ろうとしているのでしょうか。

うっは色々なストレスがかかることで脳の神経活動が弱ることから始まります。そこで、「生体機能制御学」という分野で、ストレスに負けないというより、しなやかに受け止めるためのメカニズムを見つけていきたいと考えています。脳内の海馬には様々な出来事を感情と統合して記憶するのではないかの判断をする機能があり、細胞レベルでの研究を行なっています。

海外留学でアイデンティティを知る

3年間の海外留学も体験されたそうですね。

ポスドク（博士研究員）時代の恩師に、「研究者になるのなら自分をしっかり見なさい。自分のテーマを見つけることで独り立ちできる」と言われました。

32歳の頃にアメリカのイェール大学に博士研究員として留学できましたが、夫は仕事や家庭の事情があつて大阪から離れることができず、結果的に結婚してすぐに、3年間離れて暮らすことになりました。また帰国後も数年後には私が東京理科大学で職を得たため、合計9年近く別居生活という状態が続きました。子供がまだ小学生だったため、子供が病気をした時や私が出張に行く時は、夫が平日に東京に来たりと綱渡りの時期が続きました。

そんな生活が維持できたのは、イェール大学の同僚たちが皆一流の研究者でありな

がら、家族も大事にし、男性も子育てに協力し、女性も研究と生活をしっかり両立させている姿を見られたからだと思います。子供が中学校に行くようになったころ、環境が整い、夫が東京に職を得て、ようやく家族みんなで暮らせるようになりました。子育てという限られた時間を大切にしたいという願いが実現できたのです。

馬術部で、共に活動することを知る

学生時代の馬術部での経験が研究でも役立つとうかがいましたが。

馬術部では朝昼晩ずっと馬の世話をします。1頭ずつ決まった馬が与えられ、責任を持って世話をすることになるのです。最初、馬はどれも同じに見えたのですが、ある日突然、馬の顔にも個性が見えるようになりました。そうすると、一緒に同じことをする大切さも見えてきます。競技会では自分が指示を出すけれど、馬にもやる気を持つてもらわなければならない、と思うようになったのです。

少し話は変わりますが、大学で学生たちの若い力にとってもパワーを感じるようになりました。研究者にはそれぞれの実績がありますが、知っているからこそかえって見つけられないこともたくさんあるのです。

「何も知らないから何もできない」ではなく、知らないからこそ発揮できるエネルギーが学生にはあり、研究室全体の研究を推し進めるパワーになるのです。そんな学生たちと共に研究することがとても大切な時間になっていると思います。

太田正人（ジエイクリエイト）

【写真左】アメリカから帰国する送別会でいただいたアメリカ定番のバターケーキ。Good Luck Eriと書かれている 【写真中】留学先のDuman先生（右）と、遊びに来た主人（中央）と私（左） 【写真右】イェール大学のあるNew Havenの街並み。町のいたるところに大学の建物がある

